特別寄稿

「古くて新しい大学」 松山東雲女子大学

“Old and New College” Matsuyama Shinonome Women’s College

川　東　英　子
Eiko KAWAHIGASHI
（松山東雲女子大学元教授）

松山東雲女子大学創立30周年おめでとうございます。

私は，松山東雲女子大学創立時（1992年）に就任し，2015年3月に定年で退職しました。長い非常勤講師生活を経て，晴れて専任教員で就職できた記念すべき大学でした。

この度松山東雲女子大学創立30周年に当たり，松山東雲女子大学・短期大学紀要・研究論集委員会（委員長・中島悦子講師）から，特別寄稿のご依頼を受けましたので，松山東雲女子大学の女子教育について，在職時を振り返りながら，感想を述べさせていただきます。

「古くて新しい大学」松山東雲女子大学のことをそう表現されたのは，初代学長の岡本道雄先生でした。「四国最古100年余の女子教育の伝統を継ぐという意味で古く，現代女性に必要な最新の教育内容を学際的・複合的に提供するという意味で新しい大学」[1]であると言われたのです。

松山東雲学園のルーツは，1886（明治19）年に創立された「私立松山女学校」です。創立者は，新島譲に導かれた二宮邦次郎牧師（わが国プロテスタントキリスト教教育の三つの源流の一つである「熊本バンドと同志社及び組合派教会」[2]所属）でした。勉強がしたいという重松テイの要望に応え，わずか2名の生徒のために学校を創立したのです。

松山女学校は創立早々評判が高まり，県下からたくさんの入学者が集まりました。この評判をもたらしたのは，二宮牧師の女子教育に対する「高い理想とフロンティアスピリット」であったと思います。二宮邦次郎は遺稿の中で「女性独特の技芸を身につけさせることが女子教育なのではなく，まず女性自身が，女性である前に人間として価値ある存在である事実に開眼して，人間の尊厳の認識と自覚を持つことができる人に教育するのが女子教育なのだ」[3]と述べています。

戦前の女子教育の主流は「良妻賢母」教育であり，女性は一人の独立した人間として認められず，何よりも夫に仕え，子供を養育する母となるよう教えられてきました。そのような時代に，女性の人間としての尊厳や価値を覚醒させ，女性に豊かな教養と品格を養うことを目的とした教育こそが女子教育である，と考えたのです。

私はこのような女子教育観に接し感動しました。また，その伝統が，戦前・戦後を通じて，社会運動家や政治家など素晴らしい先輩を生み出したのであり，この学園を誇りに思いました。

松山東雲女子大学の新しさは，時代の要請に応える大学であるということです。まず第1に，1990年代の早期に4年制大学を創立したことです。それまで女性の学歴は高校が主流でしたし，また女性は短大でいいという考えも根強く残っていました。しかし1990年代に女性の4年制大学への進学は一気に進み，4年制大学の創立は，時代の趨勢を読んだ松山東雲学園の革新的英断であったことを証明しました。

松山東雲女子大学の新しさの第2は，学部を，これまで女子学生の多かった文学部・家政学部・教育学部ではなく，人文学部にしたことです。しかも学際的・複合的な教育内容の，教養学部に近いリベラルアーツ教育を目指したことです。それは「国際化，情報化，高学歴化，女性の社会進出，生涯学習などの時代の要請に対応して，これからの社会にとって真に有用な女性の育成をめざすという社会的な必要性」[4]に応えるためでした。

松山東雲女子大学は，「人間文化学科」と「言語文化学科」の2学科からなる「人文学部」として発足しました。私が属したのは人間文化学科でした。本学のカリキュラムの特徴は，学際性・複合性とともに，キリスト教学が基礎に据えられていることと，女性学（ジェンダー学）関連の授業科目がおかれていたことです。「女性史」「女性社会学」「女性職業論Ⅰ・Ⅱ」など女性を冠した授業科目だけで4科目ありました。わが国で1980年代から始まったばかりの女性学関連科目が存在したことは，松山東雲学園の女子教育の伝統が引き継がれていたといえるのではないでしょうか。

松山東雲女子大学は，1999年度には，従来の2学科体制から「人間心理学科」を加えた3学科体制に拡充し，入学定員もそれまでの160人から260人に拡大しました。しかし2000年に入った頃から，バブル崩壊後の長い不況と18歳人口の減少，加えて大綱化の影響で都市圏の有名大学をはじめとする学部・学科の新増設もあり，本学の学生確保が困難になっていきました。

そのような困難を克服するため，①キャリア論（職業論特講）の立ち上げ，②資格重視，③入学定員の削減と学部・学科再編などの検討が行われました。キャリア論は，1990年代の長期不況下で学生が就職難に陥るなか，学生自身の就職意欲や能力の喚起を図る必要があると考えられ，授業科目に加えられたものです。ただし，私としては，企業側の対応（非正規雇用化）にも問題・原因があり，また「就職」だけに焦点を絞るのではなく，生涯を通して「働くこと」を人生に位置づけてほしいと考えていました。

資格志向については，様々な資格を取得できるようにカリキュラムが変更されました。将来の就職に繋がるような学術的資格だけではなく，簡易な資格や趣味的な資格も導入され，資格偏重の雰囲気が漂った時もありました。

そのような試行錯誤の中，一貫して追求されたのが，募集定員の削減であり，学部・学科の再編でした。学部・学科の再編案は二転三転し，3学科体制は「心理子ども学科」と「国際文化学科」の2学科体制へ（学部名称も「人文科学部」に変更），さらにその後「心理子ども学科」の1学科体制に縮小再編されました。本当に重苦しい時代でした。私の勤務した20余年のうち，前半の10年は明るく，研究時間も保障された素晴らしい大学（研究）生活でしたが，後半の10年は，縮小・

再編が常に付きまとい，また入試対策に多くの時間を要するようになって，研究環境も悪化していきました。

このような大学環境の悪化は，文科省の高等教育政策の転換によるところが大きかったようです。1991 年に打ち出された大学設置基準の大綱化は，18 歳人口がピークアウトして以後急減局面に入り，増えすぎた大学定員を満たすことのできない大学の淘汰が予想されるなか，それを「市場」に任せるためのものでした。少ないパイを巡り大学に個性や強みで競争させ，大学の質を高めさせるため，矢継ぎ早の大学改革（「アメリカ式」と「会社式」の吟味不十分で粗雑な濫用・導入）[5] が行われ，大学の現場は混乱と疲弊に陥ったのです。

90 年代の大綱化，2000 年代の国立大学法人化，2015 年の国立大学法人法の改正というように，国立大学においても新自由主義が一貫して展開されました。高等教育の過当競争に加えて，研究のためのお金も時間も奪われ，雇用も悪化し，果ては，大学の自治の「破壊」（学長権限の強化･支配）に至りました。その後さらに学術会議会員の任命拒否まで起こり，日本の学術世界の民主主義度は，低下の一途を辿っています。

このような重苦しい状況のもとでも，現在の松山東雲女子大学は，子どもと心理を核に女子教育に取り組み，「大学改革」に挑戦しています。そして，「子どもを軸にした地域課題に取り組むプラットフォームの構築」で，「2020 年度大学改革を成功に導く特色ある取組事例集」に選ばれました。時代の要請に応える地域課題やキャリア支援教育，そして PBL（課題解決型授業）に取り組む努力に頭が下ります。

松山東雲女子大学は，開学以来，キリスト教と女性学にもとづく女性の人権教育を重視してきました。今後もその伝統・特徴を引き継ぎ，ジェンダー平等教育として発展させるとともに，子どもと心理の専門教育＆資格教育と統合させていただきたいと思います。女性の社会参加に不可欠のジェンダー平等，特に女性差別撤廃条約の学習は重要です。また，福祉・保育系の専門職は典型的な女性職で，賃金や労働条件に恵まれないことも周知の事実です。現実を知り改革できる力を養成するためにも，労働法（特に女性の労働権）の学びは不可欠だと思います。

「古くて新しい大学」伝統の継承と革新の理念を堅持し，これからもますます発展されますことを心よりお祈り申し上げます。

注

1 『松山東雲学園創立 120 周年記念誌』2006 年、71 ページ。

2 前掲書、3 ページ。

3 前掲書、5 ページ。

4 前掲書、67 ページ。

5 佐藤郁哉著『大学改革の迷走』ちくま新書、2019 年、参照。日本の大学が世界ランキングで順位を落とし続けるなど大学危機の理由に、矢継ぎ早の大学改革政策があるとし、改革のはらむ 5 つの「病根」を詳細に分析・批判している。